

笑わないニコポ持ち

佐甲斐

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

神と名乗るおじさんが言うには転生させてくれるらしい。

なんでも『ニコポ』と言う能力もくれるそうだ。

で、『ニコポ』ってなんだい？

これは、ニコポを与えられた少年が、その能力を無自覚に振り回す物語。

そして力の正体を知った少年は……………。

序盤はタイトル詐欺。

長くてA'sまで。

目次

後悔につながるプロローグ	1
笑顔ふりまくニコポ持ち	
高町なのはとの出会い	5
私立聖祥大附属小学校にて	10
図書館の少女	15
喋る宝石	20
彼の日常	26
少女と魔法の邂逅	32
事件の翌朝	38
魔法少女が現れる	44

後悔につながるプロローグ

僕が幼なじみと共に登校をしていると突然目の前が真つ暗になって、気がついたら頭がおかしくなりそうなほどの真つ白い部屋にいた。その部屋で茫然自失していると、「僕は神なるぞ」とか妙に得意げな雰囲気と言ってくる白ローブのおじさん——といってもローブのフードで顔の半分以上が見えない。まばらに生える顎髭と声で判断——が突然目の前に現れた。

「やあ、突然だけどきみ、転生してもらおうよ」

うん？ いきなり目の前のこのおじさんは何を言っているんだ？ 転生？ 輪廻転生とかのあれのことかな。いや、僕仏教徒じゃないんだけど。無宗教の人間だ。加えてオカルトは創作としては好きだが、信じてはいない人種だ。

「いや解脱とか目指すものじゃないから、似て非なるものだよ」

ビックリだ。僕は間違つても声を出してはいないんだけど、目の前の存在には筒抜けの様だ。うーん、だとすると夢の可能性が高くなるなあ。夢にしては意識がはつきりしているんだけど、まさういう夢もあるんだろうということだ。てかどこから夢だったんだろ。やっぱ朝起きる時からか。

「君もなかなか強情だね。信じてみようよ」

いやあ、こんな話信じるのはよっぽどの純真な奴だけだつて。普通にあり得ないもの、こんなこと。

「そうだねえ。じゃあ頬でも抓つてみれば、と言いたいけど今の君は意識体だけの存在だからね。身体感覚とか無いから、余計夢みたいに思えて僕の言葉とか信じられないのも、無理は無いんだよねえ」

うん、それはいいけど早く眼を覚ましたいんだけどなあ。多分今日も幼なじみの××が登校のお誘いに来ると思うんだけど、夢の中で変なおじさんと話してたから寝坊して誘いを蹴るなんて、意味が分からないって怒られてしまうよ。いや、悲しむかな？

「いやあ、遅刻とかそういうの、今は関係ないんだけどなあ、まいいか。でさ、君の幼なじみって、どんな子なんだい？おじさんにおしえてくれよ」

心優しい女の子だよ。学校で僕が独りでも話しかけて来てくれる、いい奴さ。

「あれ、きみ友達いないの？なんで？」

なんでと言われても、出来なかつたからとしか言えない。小学校低学年まではよかつたんだけどなあ。中学年高学年とすすんで行くにつれ、話かけても怯えられて逃げられたり、無視されたりだよ。なにも悪い事した覚えは無いんだけどなあ。まあでもその中でも××だけは僕と友達でいてくれたんだ。『私だけはいつでも友達だよ』とか、『ずうつ

と私だけは一緒にいてあげる』とか。僕と一緒にいると友達いなくなるよとか言っても、『あなただけいればいいの』とか言つて、いやあ、ボツチの僕にとつては嬉しかったなあ。彼女はもう親友だね。

「いやきみそれは……まあ本人が幸せならいいか。うん、君との話で君につけてみたい能力も決まったし」

能力？

「そ、能力。転生したあとの生活を少しばかり楽しくさせるスパイスさ」

ふーん。もうなんでもいいや。適当につけちゃつてよ。僕もう眼覚ましたいし。

「ようし、きみは『ニコポ』だね。鈍感野郎とかなかなかあれだったみたいだし、さらに幼なじみ病ませてるみたいだし。なかなか面白い見物になりそうだし」

酷い事を言う。鈍感、はまあ同級生の変化に気づかなかつたんだから仕方ないとはいえ、病ませてはないだろ、病ませては。で『ニコポ』ってなにさ。

「教えてもいいけど、それじゃ詰まらないし。自分で理解しなよ。と言いたいけど無理かな？まあ理解できなくてもそうだね、9歳頃には教えてあげるよ。………もういいかな。よし、君が次に眼を覚ましたときは新しい世界に流れ着いているだろうね。精一杯生きて、僕を楽しませてくれよ」

おじさんの言葉が終わる前に僕はまた目の前が真っ暗になっていった。はああ、ただ

の夢の筈なのになんか疲れたな。授業中寝ちやいそうだな。まあ、起きてもこの夢を覚えていたら××との話の種くらいにはなりそうだな。

．．．．．
まあ結局、これは夢ではなかったのだけれど。このころの僕には、こんなフアンタジーでメルヘンな事を信じられる様な、そんな柔軟すぎる頭はもっていなかった訳で。だから『ニコポ』とかいう忌々しい能力のことも、この時は詳しく知ろうともしなかったんだ。

ああ、後悔先に立たずと言う言葉を噛み締め生きていく事になるとは、思っても見なかったなあ。

笑顔ふりまくニコポ持ち

高町なのはとの出会い

変なおじさんに転生と言ひ渡されてから5年経つ。結論を言えば夢では無かつたと言う事だ。

まさかあのおじさんの話が本当だったとは、今でもあんまり信じられない。しかしこれは夢だと逃避してみても、五年も覚めぬ夢ならば、もはや現実といつていいものなんでしょう。できれば夢であつて欲しいという思いは今でも胸の奥に燻っているけれど。

今世に生まれてからの自分はあまり思い出したくない。みつともなく騒ぎ立ててしまつていたからね。まあ、あの頃の僕が騒いだ所でよく泣く子だ程度にしか思われなかつたんだけど、精神的にはそれなりの年齢だった訳で、それが雷の様な声で騒ぎ立てていたというのはやはり恥ずかしいものがある。ああ思い出しただけで顔から火が出てきそうだ。

まあ今はある程度割り切つて、今世をそれなりに楽しく過ごしていきたいとは思えるようになった。とりあえず今世では友達を沢山作りたい。切実な願いである。あのおじさんからもらつた能力というのも気になりはするけども、まあもう名前も思い出せな

いいし、それに確かあと四年だったか経過すれば教えてもらえると言うのだから、そんな気にしなくても構わないだろう。今の僕に必要なのは友達だ。前世のような寂しい生活はもうご遠慮願いたい。それに今世には×もいない訳だし、よけいにそう思う訳だ。

という訳で公園にゴーだ。公園ならば友達が出来るはず。×と最初にあったのも公園だ。その後家が近所だと言う事が判明し前世の関係に至ったのだ。だからこの時期の僕には公園＝友達というのは成り立つ筈である。こうしてはいられない。時は金なりとか言うし、急がなくなかつちゃ。

「いつてきまーす！」

「気をつけるのよー」

母さんののんびりした声をバックに、僕は近所の公園に向かい走った。

.....

「うすうすとだけど、こうなるとは思っていたよ………」

いぎ公園についてみると、そこに同年代の子供の姿がなく、ベビーカーを揺らすお母様方と、僕の肉体年齢より幼いお子さんばかりだった。

「そうだよね、ポケモン出たばかりだもんね……」

はあ、と重いため息を吐き、とぼとぼと公園の中に入っていく。どうせここまで来たのなら、少し遊んでいかなないとなんだかもつたいたいという思考にとらわれ、じゃあ独

りで遊ぶならとしばし悩み、ブランコを漕ぐことにした。今世になつてから感性がこの肉体に引つ張られている気がする。つまるところ公園の遊具がすごく楽しい。それだけでなく甘いものとか前世より美味しく感じられるし、それに人参与ピーマンが苦手になつている。本当に子供だな僕。まあこの感性の変化が物事の切り替えの早さをも僕にもたらせてくれたから、割り切る事が出来たのだらうとも思う。この変化もそう悪いものじゃあない。

とはいえ、今回は存外ダメージがかかったらしく、ブランコに向かう足は重たい。のたのたと足を引きずるように、なめくじが如くうすのろい歩みでブランコに向かうと、そこに待望の同年代ほい女の子がいた。独り寂しげにブランコを漕いでいる。話しかけるべきなのかと一瞬考えるが、もはやそんな元氣は無いので、隣の空いているブランコをぎいこぎいこ揺らす。こういうところが友達の出来ない要因なのかな、とか考えるが、今は目先の娯楽を楽しむ。ああ、楽しい。段々勢いがつき速くなり、揺れ幅も大きくなる。うは速い。地面と平行になるのでは無いかと言う勢いでさらに漕ぐ。

しばらく漕いだら疲れてしまった。さすがにこの年齢で前世と同じ感覚で身体を動かすのは無理があつた様だ。当たり前とも言える。

ふう、と一息ついたらブランコを今度はゆつくりと揺らす。余裕が出来たので、少し気になる隣の少女を、ちらりと見てみる。うむ、何とも暗い雰囲気を漂わせた子だ。そ

れにブランコに乗っているのに全然漕いでいない。体調でも悪いのかな？ そうだとしたら大変だ。ここは声をかけた方がいいのではないか？ よけいなお節介かもしれないが、倒れでもしたら大変だ。様子を見るに親御さんはこの公園に来ていないみたいだしね。

「大丈夫？」

出来るだけ優しい声音で声をかける。女の子は突然声をかけられた事にきよとんとして、その後小首をかしげる。ああ、大丈夫かの言葉だけでは何に對してかが分からないか。

「あ、えとなんか元気なさそうだったから、それで大丈夫なのかなって……思ってた……」

すこし気恥ずかしくなり、声が少し慌てた調子になる。その僕の様子がおかしかったのか、女の子がくすりと笑う。うん、まあ結果オーライと言う奴だ。

「大丈夫だよ」

その声には確かに無理をしている感じは見られない。なら何故こんなに暗い雰囲気漂わせているのだろうか。

「じゃあ、なんで暗いの？」

中の人が見た目の数倍年を取っているとは思えないものの聞き方である。しょうが

ないじゃん、人と話すのは慣れていないんだ。

ほら。たちまち女の子の顔が不機嫌になつていく。

「君には関係ないよ」

ぷいと女の子がそっぽ向く。込み入った事なのだろう。それを他人が無遠慮に踏み込もうとしたら幼心に腹をたてるのも無理から無いことだ。こういつたときは謝つた方がいいのだろう。

「……………めんね」

「……………いいよ」

どうやら許してもらえた様だ。優しい心の持ち主なのだろう。このまま優しい心につけ込んで、友達になつて貰おうか？ なんだか下種い思考だけど、まあ気にしない。

「僕、藤木健太つていうんだ。君は？」

「高町……………高町なのは」

にこりと微笑みながら自己紹介。女の子の頬に僅かに朱で染まる。

「あの、できれば友達になつてくれないかなーつて」

なんだか恥ずかしくなり頬をほりほり搔く。彼女はにこりと微笑み、

「いよ」

と答えてくれた。

私立聖祥大附属小学校にて

なのはちやんと出会ってから約一年経過した。

なのはちやんがあ頃暗かったのは、お父さんが大きな事故にあい入院、いつ死んでしまうかも分からないほどの重体だったからだそうだ。更にそのことで家族みんながぴりぴりとして、なのはちやんの眼から見て少し冷たい対応をさせられてしまったようだ。お父さんの入院による不安と家族間に走った小さな不和、それが彼女のあの雰囲気の原因だったのだ。

僕にはかける言葉もやれることも無かったけど、一緒に遊ぶことで大分救われていたとなのはちやんが言ってくれたのは、なんだかとても嬉しかった。親友みたいじゃね？と不謹慎に考えたのは秘密だ。

まあそのお父さんも数ヶ月前に目覚めてリハビリも問題なくこなし無事退院。今では家族仲も良好だと言う。彼女も本来の明るい表情に戻り、出会ったばかりの頃はあまり笑わなかったなのはちやんもいまでは大分笑う様になっっている。

そして現在、僕らは今小学校に通っている。というか今登校するため歩いている。はまあいいとして、僕らの通う学校、なんと私立だ。お受験があったよお受験が。前世で

はテレビの向こう側の話だったから少し興奮してしまった。

と、ここまでではいいのだ。ここまで僕は友達を作り続けた。しかし私立という事で同じ学校に通う子は大分減ってしまった。この時期と言うのはよつぽど仲が良くない限り、違う学校に通う者とは疎遠になるものだ。下手をすればクラス分けの結果疎遠になるということも十分あり得る時期だからね。まあ本の知識だけだ。

前世では小学校の、中学年頃に友達たちは僕から離れ始めた。何が原因なのか分からなかったから、とにかくこの時期から気をつけて、注意深く動くしかない。

対策を考えながら歩くと、知らぬ間に早歩きとなっていたらしい。普段より速く学バスの乗り場についた。

うむ、考えていても全く思い浮かばない。数撃ちや当たる作戦、つまるところ片っ端から友達を作れば……いやさすがの僕でも不誠実だなと感じる。しかし気をつけなければならぬのは、この僕の通う学校、私立聖祥大附属小学校はエスカレーター式であると言うことだ。中学、高校に新しい風があまり入らず、人間関係が継続されていくのだ。考えたら怖くなってきた。とにかくがんばらないと。

「健太くーん」

この声は姿を見なくとも分かる。僕の中で勝手に親友と思っているのはちゃんの声だ。

「おはようなのはちゃん」

にっこり微笑みながら挨拶をする。笑顔で挨拶が大事となにかで見た気がするからだ。内心蕪にもすがりたい心持ちなのである。

なのはちゃんは走って来たため頬が赤く上気しながらも、

「おはよう」

と返してくれた。うん朝の挨拶は大事だね。朝ご飯並みに大事だよ。ちなみなのはちゃんの家は僕の家とは学バスの乗り場を挟んで反対になる。

「今日は速いんだね」

「ぼーと歩いていたら早歩きになっちゃってね」

他愛ない世間話をしながら待つと、直にバスが来た。次々と生徒が乗っていく。今日も楽しい一日になると信じて。

・・・・・・・・・・・・・・・・

その事件は昼休みに起きた。

なのはちゃんと一緒に校舎と体育館をつなぐ渡り廊下に行った時だ。偶然人気の無い所に二人の少女が争う声が聞こえて来た。なのはちゃんと一緒に様子を見に行くと、同じクラスのつんけんして近寄りがない金髪の女の子と、いつも静かに本を読んでいる髪の長い女の子、えーと、たしかつんけん少女がアリソン・バーニングで文学少女

が辻村すずねだったかな?とにかくその二人が喧嘩をしている。バーニングさんが辻村さんがいつもつけているカチューシャを持っていて、辻村さんが必死に奪い返そうとしていることから喧嘩の原因が伺える。

とにかく止めさせないのかな、と思った僕が声をかけるより早く、

「やめてー!」

なのはちやんが止めに入った。なのはちやんは中々に正義感の強い子だからね。運動音痴と言う割には先に身体が動くし。

その後バーニングさんとなのはちやんが激しい舌戦を開戦し、僕はそれを少しびくついた思いをしながらも、辻村さんと協力して宥めた。いやはや、あれは小学一年生が出せる迫力じゃないよ。

なんでも喧嘩の理由というのは、辻村さんのカチューシャを見てみたいから取ったら……という子供にありがちな理由であった。もう今は辻村さんとバーニングさんはもちろんなのはちやんもごめんなさいをして、仲直りをしたようだ。今では3人で笑い合っている。少年漫画のような清々しさだ。正直懂れる。

「で、アンタ名前は何?」

バーニングさんが平時より幾分か和らいだ声で僕に問いかけて来た。ああ、忘れ去られたかと思ったけどよかった、意識の端位には気にしてもらえていたみたいだ。

「僕は藤木健太っていうんだ。よろしくね」

同じクラスなんだから名前くらい覚えてよ、という思いを飲み込み、にこりと微笑む。

「そ、そう。アタシはアリサ・バニングスよ。よろしく願いますわ」

「あ、私は月村すずかだよ」

……うん。まだ入学してそんなに経っていないからね。名前を覚えていないのもしょうがないよね。

その後は時間が許す限り話をして、この昼休みの終了のチャイムが響く頃には大分仲良くなれたと思う。

図書館の少女

アリサちゃんとすずかちゃんの喧嘩と和解からまた数ヶ月経つ。今ではすっかり仲良しさんのようで、なのはちちゃんと女の子3人、学校ではいつも一緒にいる。僕も3人と過ごす時間は多い。まあ男友達も作りたいからいつも一緒に言う訳には行かないけどね。お昼とかも、給食制でなくお弁当制ということもあつて一緒に食べよう、と誘ってくれるけど、僕が男友達とお昼を取る時に残念そうな顔をするのはやめて欲しい。罪悪感に飲まれる。

さて、今日は全くの暇な日だ。する事が無い。まあ夏休みだからね今。一ヶ月もあればこういう暇な日も出来る。さて、どうしようかな？お母さんとお父さんの教育方針で十歳まではゲーム禁止だからゲーム機ないし、宿題も絵日記以外は終わらせた。家にある本は読み飽きたしなあ……………。本、本かあ。うん、そうだ図書館に行こう。

ああ、暑かった。道中何回か後悔したが、冷房のきいた図書館の中に入ったならそんな後悔も失せてしまった。よし、目指すは児童文学のコーナーだ。前世はあまり児童文学は読まなかったけれど、今世ではどはまりしてしまった。やはり僕も男の子、冒険もの

が面白い。

児童文学のコーナーにて、何を読もうか迷っていると、車椅子に乗った茶髪の少女がやって来た。彼女は既に何冊か本をその手に持っているが、まだ借りるのか。さすがにちやん並の読書家だな。

あんまりじろじろ見るのもあまり人道的にいい事ではないので、本棚に視線を戻す。ああどーれーにーしようかな。こう言うのは一度悩みだすとなかなか抜ける事が出来ない。前世でも×××がそのことでよくからかかってきたなあ。懐かしい。

ふと一冊の本に眼が留まった。なかなか心引かれるタイトルである。よし決めたとその本に手を伸ばしたら先ほどの彼女と手が重なってしまった。

「あ、い、い、いめん」

「い、いえ」

とつさに手を引いてしまう。なんとなく気恥ずかしさを感じる。思春期の中学生か僕は、いや前世は中学生だったろ、と脳内一人漫才をかます。

女の子は僕と同じ奴が読みたいようで、けれども同じだからためらっているらしい。ここは先を譲るといふのが精神的年長者の役目というものである。というかこれを取っていくのは何と言うか大人げない。

「どうぞ、先に読みなよ」

字面だけではなんだか急かしている嫌な奴、みたいな感じがするので、につこり笑顔を加えてみる。女の子は僕と同じような恥ずかしさを感じたのか顔を赤くしながらも、首をぶんぶん左右に振って、

「さ、さきぎに手えだしたんはそつちやし……」

言葉だけ聞いたら不良の喧嘩みたいだ、と思つたのは内緒。しかし謙虚な子だ。この位の年頃の子はあげると言えば一部例外を除き、あまり深く考えずに持つていつてしまふという子がほとんどなのに。前世のこの年齢の僕でもそうだったと思うぞ。ちなみにぼつと思いつく例外はあの3人娘だ。あの子達は本当に精神年齢が高い。そしてこの子も例外に含まれる子なのだろう。

しかしどうやって説得しようかな？

「えーと、僕読むのがすごく遅いんだ。だから先に読みなよ」

うん、我ながらよく分からない変ないい訳だ。読むのが遅かろうが速かろうが一週間後の返却日に返すと言うのなら同じである。女の子の持つ本の冊数を見るに、借りて帰るのは分かりきった事なので、この言い訳は通用しないだろう。女の子も一瞬ほかんとした後くすくす笑って、

「そういうことならしょうがないな。おおきに」

と樂しげに言うると一礼して、カウンターへと向かつていった。こつちの意を汲む能力

まで持っていたらしい。まあとにかく、これで僕の小さな見栄は守られたと言うことだ。

さて、僕は何を読もうかな？まあ時間は有り余っているんだ。ゆっくり決めよう。

.....

一週間後、僕は前に借りた本数冊を返しに、また図書館へと訪れた。

夏休みももうすぐ終わりだなあとか考えながらカウンターののお姉さんに本を返して、ぶらぶらとまた児童文学のコーナーへと足を向かわせる。すると今度は一週間前とは逆に、先に児童文学のコーナーに車椅子の少女がいた。

「こんにちは」

微笑みながら挨拶を試してみる。彼女は気がついた様で、眼をぱちくりさせた後何故か顔を赤くさせ微笑んで、

「こんにちは。この前はほんまにありがとうございます」

「本を譲ったくらいだよ。そんな感謝されることじゃないよ」

お互いうるさくならない程度に小さく笑い合う。

「せ、せや、よければ、その、名前、教えてもらえへんか？あ、私は八神はやてや」

「うん、いいよ。僕は藤木健太。よろしくね、はやてちゃん」

「（ちら）そ、よろしゅう」

自己紹介後におもしろそうな本を片手にテーブルに着いた後、世間話をしていたらいつの間にはやはやてちゃんの境遇の話になって、愕然としてしまった。なんせ、こんな小さい子が一軒家に一人暮らしをしているのだと言う。まったく常識では考えられないことだ。

とりあえず、僕の家電話番号と住所を教えておいた。僕に出来る事なんてほとんどないけど、いざと言う時に何かあったときに、些細な事でも助けになれたらと思つて。ただ教えた時に小さくガツツポーズをしたのは何故なんだい？

喋る宝石

『やあー元気にしているかな』

8歳の誕生日、楽しかったお誕生日会も終わり、お風呂にも入ってさあ寝よう、と自分の部屋に入ると、どこからか何故か懐かしさを感じる声が聞こえて来た。

『ああ、君の勉強机の上見てご覧。宝石があるだろう？』

あまりにも不審きあまりなく、今にも逃げ出したい。幽霊でも出て来たらどうしてくれると言うのか。しかし、どうしてか逆らえず、声に促されるまま勉強机の上を見る。

整った机の上に、ちよこんと丸くて澄んだ黒さをもつ、宝石の様な石が置かれていた。『そうそうそれぞれ、と、所で僕は覚えているよね？』

声は宝石から発せられているようだ。とんだファンタジーである。まあ転生と喋る宝石、どっちもファンタジーさではどっこいどっこいか。で、覚えているかどうかと聞かれても、僕に宝石の知り合いはいない。

『いや僕は宝石じゃないから。今はこの子を媒介にして君と話してるだけだから』
あれ？この心読まれる感じは……………。

『そうご明察、神様だよ』

なんと8年ぶりの神様でした。神様が出て来たと言う事は僕につけられたなんとか、とか言う能力の説明に来てくれたのかな。あれ？でもそれは9歳の時の話じゃなかったけ？

『うん。今回は能力の説明はないよ。ただ君に誕生日プレゼントと、君が巻き込まれるであろう物語を、ネタばらしにならない程度に話そうかなと思ってね』

巻き込まれる物語？この転生人生以上に僕は何に巻き込まれると言うのか。冒険の旅にでも出るとでも？

『いや、物語の舞台は君の今住んでいる街海鳴市だよ』

そうなのか。冒険では無いとしたらどんなお話が始まると言うのだろう。ホラーの類いは嫌だな。転生してから、幽霊が本当にいるかは確認をとれていないけれど、死んだ後はどうなるか分からない以上、それらの存在がいる可能性は決してゼロでは無いと知り、必要以上の苦手となってしまっている。お化け屋敷に入ったのなら絶対に腰を抜かす事となるだろう。

『まあ安心しなよ。確かに幽霊はそこら中にいるけどさ。君と関わり合う事はないし、この話もオカルトの類いと言えなくもない話だけど、幽霊は出ない変わりに魔法が出てくるのさ』

いや安心できないよ。そこら中にいるとか今たまたま見えてないだけじゃん。それ

に魔法？そんなものまであるの？もうなんでもありじゃないかそこまできたらさ。いや神様がいる時点でなんでもありだけど、そんなほいほい世界中にファンタジーが溢れているとは思わなかったよ。

『ははは、実は君の前世の世界も裏では色々あつたんだよ、とまあ無駄話はおしまい。本題に入ろうじゃない』

あくまでゆるい調子のみままで話を続ける神様。

『来年の春にね。君と仲良しの女の子、確かなのはちゃんつて子がいるでしょ？あの子がとある事件に巻き込まれるんだよ。それが魔法関連の事件だったわけさ』

なのはちゃんそんなファンタジーの住人に仲間入りするのか。大丈夫かな？まあ僕も一緒にというのならフォロー位はできるかな？で、それで？

『これ以上は駄目だよ。ネタばらしになりそうだし』

なんとというか、それだけの話ならばわざわざ話さないでよかったと思うんだけど。あとネタばらししても別にいいんじゃないかな。別にアニメや漫画や映画やらじゃないんだし。

『僕の娯楽のためだね。何も知らない人が巻き込まれる方が面白いと思うんだよ。そもそも君を転成させたのも娯楽だしさ。まあドラマでも見ている気分で楽しませてもらっているよ』

勝手に転生させられた時から思っていた事ではあるけれど、ここまではた迷惑だとは思わなかったよ。

『ま、落ち着いて落ち着いて。それに今回は話だけじゃなくてプレゼントもあるって言ったでしょ？それがあれば来年の対策にもなるよ。僕はそろそろ帰らせてもらうけど、僕の声が聴こえなくなったらこの宝石に触ってごらん』

なんか釈然としないけど、どちらにせよ僕では神様に逆らうとかそんな大それたことはできないし、結局はおとなしく従うしか無いのだ。

『うん、あきらめがよくてよろしい！じゃまたね』

という声が聞こるとともに宝石が心なしか先ほどより黒くなった気がする。しばらく待ってももう声は聴こえてこないの、言われた通りに触ってみる。

『ブラックハート起動しました。おはようございます。マスター』

おお、今度は機械的な女性の声が宝石から聴こえて来たぞ。もはやこの程度は驚かなくなっている自分が嫌だ。まあそんなことは置いといて、話せるというのなら聴きたい事がある

「君は、えーとなんなんだい？」

『私はインテリジェントデバイスと言われる、有り体に言えば魔法使いの杖です』

おお、最近の魔法使いの杖と言うのは宝石なのか。それに喋ることもできるとは、な

んだかハイスペックだなあ。

「へー、魔法使いの杖ってことは、僕も魔法を使えたりするのかい？」

『はい。魔力総量AAクラス相当、なかなかですな』

「よく分からないけど、そうなんだ」

なんとというか、さつきもで神様の勝手さに腹が立っていたけど、なんかわくわくしてきた。自分でも現金な奴だと思う。しかし男に生まれたのならば、不思議な力と言うものに胸を高鳴らせるということは必然と言っている。

『ではマスター。起動に際し、登録するバリアジャケットのデザインをお決めください』
「……………バリアジャケットってなに？」

『バリアジャケットとは魔法使いがその身に身につける防護服のことです。デザインが決まりましたら、頭の中で思い浮かべながら私を持ち、ブラックハートセットアップ、と唱えてください』

どうしようかな、やっぱりかっこいいのがいいよね。でもごちゃごちゃしてたら動きにくそうだし、ある程度スッキリさせておきたい。

「よし、決めた！ブラックハート、セットアップ!!」

変化は一瞬であった。一瞬のうちに僕の服装はパジャマから、黒いマントを羽織、その下に軽い胸当ての着いた服を着て脛当ての着いたズボンを履いた姿になった。思っ

たよりダサイ。まあいいや。あこがれのマントを身につけることができたし。それよりいつの間にやら手に持っていた、3本のかぎ爪のようなものと、そのかぎ爪に守られる様に包まれた黒い宝石が先端に着いている杖はなに？

『この杖が私です、マスター』

おお、まさしく魔法使いの杖といった感じで興奮して来た。

『マスター、バリアジャケットの登録が完了しました。次回よりこの形態を展開します。では、明日より魔法の訓練を開始します。今日はもうお休みになつてください』

ブラックハートの言葉に平静を保ちつつ、念じれば解除されると言うので、念じてもとの姿に戻る。もういい時間だ、速く寝よう。いそいそと布団に潜り込む。

ああでも、興奮で眠れる気がしないなあ。

彼の日常

奇妙な夢を見た。金髪で何処かの民族衣装の様な物を着た少年が、黒い変な物に追いかけていると言う夢だ。まったく見覚えの無い少年を夢で見る事があるのかは分からないが、まあ害はないと思う。所詮は夢なのだ。

『おはようございます、マスター。今日の訓練を開始しましょう』

そう、そんな夢よりも大事な事がある。ブラックハートとの毎朝4時スタートの早朝訓練だ。早速ばれない様に必要な物と重りを詰めこんだリュックサックを背負い込み、こそこそと窓から家を出て行く。気分は亀仙流だ。

家から数キロほど走り人気の無い公園に出る。ここは探し当てるまで苦勞した絶好の修行場所である。……廃墟と化した団地にある公園という、絶好の肝試しスポットでもあるが。最初は怖かったが、ブラックハートと一緒にいてくれるし、いざ始めれば周りは気にならなくなるので、まあなんとかなっている。

荒い息を整えタオルで汗を拭いたら、

『では、始めましょうマスター』

「わかってるよ」

ブラックハートをセットアップした後、リュックサックの中から十個空き缶を取り出し、空中に放る。

「キューブバインド・ロックッ！」

灰色に近い黒色をした丸い魔法陣を四つ空き缶を囲む様に展開、そこから同色の球体の拘束魔法が空き缶を包み、その場に固定させる。しかし球体を形成している間に2、3個の空き缶が先に地に落ちてしまう。

「クラツシユツッ！」

球体が急速に縮み、空き缶は粉々となった。

『新しい魔法はどうですか？』

「うーん、隙が大きいいね。球体を作っている間に逃げられちゃうし、そもそもこれ人に使えないよね？死んじゃうよ」

『そうですね。形成時間に関しては私の方でプログラムの効率化を計れば、現状より1.2倍は早く形成できるでしょう。しかし、これではいくら非殺傷設定でも重傷は避けられないでしょうね』

この早朝訓練では、たまに僕が考えた魔法をこうして試している。まあ、うまくいく方が珍しい。魔力を使いすぎるとか、ピーキーになりすぎて使い勝手が悪いとか、今回の様に隙が大きかったり、威力が強すぎたりすることもある。でもこうして新しい魔法

を考えて試すと言うのは、本当に楽しい。目指すは『ぼくのかんがえたさいきょうのまほう』を世に轟かすことである。とは言っても、

「なんでバインドなんだろうなあ」

『しかたありません。才能は選べるものでは無いのですから。お持ちであるだけよろしいではありませんか』

僕にはバインドの才能がある。それ以外の全てが平均以下値程度の適正しか無いのに、バインドの適正は異常に高いとブラックハートが言っていた。平均的がどれほどのものかは分からないが、神様特製であるブラックハートの言葉だ。信用に値するだろう。

しかし、拘束魔法の才能というのはこう言つてはなんだが、とても地味である。もう少し派手だったら嬉しかったんだけど。ブラックハートの言う通り、贅沢な悩みであると言う事は分かっているのだが、まあこればかりはね。まだまだ感性は子供なのである。

『では、いつも通りのメニューをこなしてください』

言われて先ほどの様にリユククサクから空き缶を取り出し放り投げ、片っ端から単純なバインドをかける。反応速度と練度をあげるためだ。協力してくれる人がいるのならランダムに投げてもらったりしてもつといいんだけど、贅沢は言っていられない、

さて、今日も気合いを入れてがんばらなくちゃね。

.....
「将来の夢かあ……」

昼休み、今日はいつもの3人とご飯を食べている。そこで話題に上がったのが、今日の授業で聞かれた将来つきたい仕事と言うものについてだ。

ほかの3人は、アリサちゃんが親御さんの仕事を継ぐ、ないしは手伝いたいということ、すずかちゃんは工学系に進んで専門職につきたいということらしい。一方なのはちゃんはまだ将来のヴィジョンが明確では無いらしく、悩んだ素振りを見せていた。まあまだ小学生なんだから、これが当たり前だと思う。前の二人が小3にあるまじき将来設定だったただけだよ。僕なんて前世中学生のときですら、将来というのはあまり考えてい無かったし。

「あ！でも」

なのはちゃんがこちらをちらちら見ながら、顔を赤くして言う。

「お嫁さんとかいいかなあなんて」

「な！」

「え？」

「可愛らしい夢だね」

おにぎりをもくもく食べながら答える。×もよく言っていたなあ。と、最近感じることの少なくなつた懐かしさを、久方ぶりに味わう。

しかしまあ、この発言から鑑みるに、彼女が僕に好意を持っていると言うのは勘違いではなかつた様だ。思えば×も僕に好意を持っていたのだろう。前世はまわりから人が去つていつたせいで余裕が無く、気がつくことができなかった。前世の話は置いといて、なのはちゃんはいまだ小学3年生、俗にいう恋いに恋している状態なのだろう。こうしてはぐらかして答えていけば、そのうち覚めてしまうと思う。なんせ、僕にとつてなのはちゃんは親友で妹分という認識なのだ。どうにも恋愛対象として見る事が出来ない。精神的ロリコンという問題もある。でも正面切つて否定するのが怖くて、こんなへたれ戦法を取つてしまう。

「あああああ、あんたは何言つてんのよ!」

「なのはちゃん……?」

さっきの発言に動揺していたアリサちゃんとすずかちゃんがなのはちゃんに迫る。……まさか二人も、なんて事は無いだろうね?

一頻り騒いでいたら、満足したのか二人はなのはちゃんから離れる。

「で、あんたは将来はなんになりたいの?」

「僕？僕は……」

僕はなんになりたいのだろう？そいえば考えた事が無かった。

「考えておくとよ」

しばらく悩んだけど、今の僕にはこの答えが精一杯だ。

だからそんな呆れた顔しないでよ。

.....

今日はあの3人の塾の日なので、これ幸いと廢墟団地に向かう。最近僕がどこに向かうにも付いてこようとするので、ちよつと大変だ。

はやてちゃんともそんな感じであの3人は出会った。僕が図書館に向かった日にいつの間にか尾行されていて、僕とはやてちゃんが話していると飛び出して来た。あの時は本当にビックリしたなあ。それ以降尾行とかには気をつけている。一応見られちゃ駄目だろうしね、魔法を使う所は。

「さて、父さんと母さんを心配させたくないし、夕方までがんばろう」

『はい、マスター』

僕はいつもの様にブラックハートをセットアップした。

少女と魔法の邂逅

「ふあああ」

なんだかとても眠い。放課後の魔法訓練がんばったからなあ。しかしまだ夜は始まったばかり。新しいバインド魔法の枠組みだけでも思いつくまでは眠れない。眠い眼をこすり僕は勉強机にかじりつく。でもなかなか思いつかない。結構試したし、ネタ切れの感は否めない。対人相手に試せるんだったらもつと捗るんだけどね。

ブラックハートと相談しながら構築していると、突然頭に声が響く。

『ボクの声が聞こえますか？声が聞こえるあなた、ボクに力を貸してください！』

切羽詰まり焦っていることが丸わかりな声だ。そしてこれは普段生活していれば聞く事ができない声。

「なんで念話か？」

念話とは初歩の初歩の魔法で、テレパシーの様な物らしい。ブラックハートがそう教えてくれた。今まで念話はブラックハートとしか使ったことがなかったので、突然響いた声に少しビクついてしまったのは内緒。

『近くに魔力反応を確認。念話を発した相手はそこにいると推測します。どうします

か、マスター』

「……行こうか」

しばし考えて、行く事に決定。もしかしたら僕の考えたバインドを試すチャンスがくるかもしれない。そうと決まれば行かないとね。ばれないようにそーつと窓から飛び出す。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「えーと、ああ、あれか」

ピンクの魔力光が、結界により外界から閉ざされた暗い町中で鮮やかに光輝いて見える。奇麗だなあ。僕の魔力光は黒色だから、かっこいいとは思うけど華やかではない。うーむ、ああいう色の方が戦闘とかでは映えるのだろうか？

近づいてみればあのピンクの魔力光を発していたのはなのはちゃんであった。聖祥の制服を元にしたのであろうバリアジャケットを身にまとっている。ああ、これが神様の言っていた事件とやらか。そう頭の中に思い浮かべ、なのはちゃんと対峙しているモノをみやる。

「て、なにあれ!？」

『密度の高い魔力の集合体かと』

あの黒いもやもやが？僕のようなにわか魔法使いでもわかるものすごい魔力量を

放っているあれが巻き込まれる『事件』だともいうのか。だとすれば、なんとも危険な事か。とにかくこのままではなのはちやんが確実に危ない。

「アツドバインド！」

黒いもやもやの上にアーチを描く様に半円のバインドを形成する。それをギロチンの様に黒いもやもやへと振り下ろす。黒いもやもやが突然のことに驚き、じたばたと陸にあげられた魚の様に暴れるが、その程度で振りほどけるものでは無い。巨木ですら折れるほどの力だからね！

「あれ、健太君!?なんでここにいるの!?!」

「あ、あなたは誰なんですか!?!」

「いまはそれよりあれをどうにかするのが先でしょ!どうすればいいのさあれ!?!」

なのはちやんと喋るイタチみたいなのがこちらに気付き、驚きの声をあげているが、今はそれどころではないと思う。あれは絶対に放置してはいけけないものだ。

「そ、そうだ!なのはさん!心を澄ませてください。そして心に思い浮かんだ呪文を唱えて!」

言われなのはちやんは集中する様に眼を閉じる。あまりかっこうつかないから言葉に出さないけど速くして欲しい。あのもやもやの力がやはり魔力相当に強くて、結構辛いんだ。

数秒してなのはちゃんは眼を開く。そして彼女の呪文を紡ぐ。

「リリカル、マジカル！」

「封印すべきは悪しき器！」

「ジュエルシード、封印！」

うお、なのはちゃんのデバイスが変形しただど!?べ、べつつにうらやましくないよ!あの光の翼みたいなのに憧れてないから!ブラックハートがナンバーワンだから!!

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル21!、封印!!」

彼女のデバイスからリボン状の魔力が放たれ、もやもやに突き刺さる。なのはちゃん、こんなこともできるのか………。僕なんて魔力弾を一つ作るのにも苦労したのに。しかし、バインドを魔力弾に仕込むと簡単に作る事が出来た上に、複数作成も容易にできる様になった。なんというか、僕のバインド関連のこだわりはなんなのだ。

もやもやは断末魔の様な声を上げ、発光したと思ったらその姿を消した。もやもやの居た所にはなにやら宝石のようなものが転がっている。

なのはちゃんとイタチっぽいのと一緒にそれに近づいてみる。綺麗な青色をしていて、思わず触ってみたくなるような不思議な魅力を放っていた。

「レイジングハートで触れてください」

イタチの言葉のままに、なのはちゃんはレイジングハートと呼ばれたデバイスを宝石

に近づけ、そしてレイジングハートが宝石を取り込む。

「これで一安心です。それで、あなたは？」

「そうそう、健太君なんでもここに居るの!？」

イタチっぽいものなのはちやんが食らいつくように聴いてくる。けれど、今日は恐らくやめた方がいいだろう。だって、

「サイレンの音が聴こえて来たし、それはまた明日ということ。ほらなのはちやん帰った帰った。イタチ君は……どうする？ 家来る？」

このイタチ君はどう考えても魔法関連だ。家に来てくれたら質問攻めにしてやろう。

「うちで飼っていいか聴いたんだけど……」

「そっか。じゃあなのはちやん家の方がいいのかな？」

うーむ。こういうのは、事前に了承を得ている家の方がいいだろうからなあ。まあ質問なんて明日にでも出来るか。

話についていけてなかったイタチ君は、なのはちやんの家にお世話になると分かったのか、なのはちやんの方に向かい、お願いしますと頭を下げている。

「じゃあ気をつけて帰るんだよー」

自分でも間が抜けた声だなあとと思うが、実際あのもやもやを抑えていたせいでかなり疲れて気が抜けているので、ここはしようがないということにして欲しい。

「健太君もねー！」

「今日はありがとうございました」

あの二人も疲れている様だが、まだ多少元気はある様だ。でもまあ、明日寝坊しなけりゃいいんだけど。

事件の翌朝

眠いです。布団の中でぼそりそ眩く。母さんが早く起きて来なさい、という大きな声の呼びかけで久々に眼をさました。早朝訓練の時間に起きられなかったこととか何時以来だろうか？まあでも、昨日は思いつきりオーバーワークだったからなあ。布団が二度寝のお誘いをしてくるけど、それをはね除け起きる。その時、

『おはよう、健太君』

「へえいあつ!!」

ビックリして変な声出たうえに、飛び跳ねてしまった。幸いにして母さんには聴こえてい無かったようだ。それにしても今の声は何だろう。ブラックハートの声とは違うしなあ。寝ぼけた頭を振りながら考えていたら、答えが出たきた。そうだ、いまのはなのはちやんの声だ。

「あれ、どうしてなのはちやんの声が？」

『まだ寝惚けているのですか』

ブラックハートの少し呆れた声で思い当たる。そうだ、なのはちやん魔法使いになつたんだ。ならば念話の一つや二つ、別におかしな事は無い。しかしさつきまでそのこと

を頭に思い浮かべていたのに、なんで忘れてるんだよ僕はさ。これが寝起きクオリティか。

『あれ？健太君まだ眠ってるの？遅刻しちゃうよ！』

少し焦っているかのような、なのはちゃんの声。それはそうだ。母さんが起こす時は本当に遅刻ぎりぎりの時だけだから、未だ眠っているとしたらそれはもう遅刻確定となってしまう。

『起きてるよ、なのはちゃん。おはよう』

いそいそ着替えを済ましながら、なのはちゃんの念話に答える。

『よかった。えへへ、今日は私が一番におはようを言えたのかな？』

『そうだね。今日は起きるの遅かったから、母さんにも父さんにもおはよう言えてないよ……』

父さんはもう仕事に行た時間だろう。なんだか挨拶をしていないだけで悪い事をした気分になる。

『にやははは……昨日は大変だったね。そうだ、ユーノ君が話したいって言ってるよ』

『おはようございます。えと、昨日はありがとうございます』

ユーノ君って誰？と聴くより早く、男の子の声が頭に響く。ああと、これは昨日のイタチ君の声だな。そうか、彼はユーノという名前だったのか。

『こちらこそおはようございます、ユーノ君。僕は藤木健太っていうんだ』

『はい、ボクはユーノ・スクライアといいます。よろしくお願いします』

鞆を持ち、リビングに行き用意されている朝ご飯を、いただきますの声とともにかっ込む。急がないと遅刻してしまう。

『別に敬語じゃなくていいんだよ？』

『ご飯を食べながら念話での会話を続ける。』

『は、はい、じゃなかった。分かったよ、健太』

『うん、それでいこう。で、話したいことって？』

『ごちそうさまと手を合わせ、鞆を背負い込み行つてきますと家を出て行く。よし、この時間ならばバスにギリギリ間に合う！』

『一つは昨日のお礼を。もう一つは、君はなんで魔法を使えるんだい？』

『あ、それ私も聴きたかったんだ』

『そう言えば、昨日はその事の説明をしていなかったな。とは言つても、神様がデバイスしてくれたから、なんてことは言えない。それに、全力を出して走っているので念話しながらというのは少し辛い。』

『それはまた、遅刻の危機が去った後で！』

『うおおおおおおおおお！間に合ええええええええええ！』

「へえ、フェレットか」

「そう、下校中に怪我して倒れてる所を助けたのよ」

「小ちやくて、かわいかったよ」

「それは見てみたかったなあ」

なんとか間に合い教室に入った僕を待ち受けていたのは、少し興奮した様子のアリサちゃんとすずかちゃん、そして困った顔のなのはちゃんであった。

なんでも、ユーノ君はこの3人が下校中に発見し、動物病院へつれて行ったのだと言う。しかし昨日のあの戦闘やらのせいで動物病院が壊れたという事をきいた二人がユーノ君を心配していた。そこで昨夜、ユーノ君を連れ帰ったとなのはちゃんが心配で顔を青くする二人に告げたことにより、ユーノ君の事で二人がなのはちゃんを質問攻めにしたようだ。二人とも動物好きだしね。

それにしても……………ユーノ君イタチじゃなかったんだね。フェレットとか僕初めて聴いたよ。

雑談をしていると、チャイムが鳴った。

「じゃあまた、質問タイムは休み時間だね」

名残惜しそうではあったけれど、それぞれみんな席についた。

朝のホームルームが終わり、とくに滞りも無く授業に入る。授業中は暇だ。新しい魔法を考える位暇だ。どうにも僕のバインド魔法は攻撃力特化のきらいがある。バインドなのにだ。ここはもつと原点に帰って、動きを止めることに特化させたバインドを作ろうじゃないか。例えば、兆兆細かなバインドで筋繊維を縛るとか、見えない位細い糸状のバインドで罫を作るとか。……いやこれは無理だとしても、なにかあるだろう。

『それで、健太の話の続きを聴いてもいいかな?』

『そうだよ!今度こそは教えてよね!』

うんうん唸ってアイディアを絞り出していると、ユ一ノ君となのはちゃんの声が頭に響いて来た。いや別に勿体つけている訳ではなくて、今までタイミングが悪かっただけなんだけどね。

『いやあ、僕は去年にデバイスを変なおじさんから貰っただけだよ』

嘘はついてない。このおじさんを神様と言い換えれば全ての説明が終わる。

『そんな……嘘じゃないよね?』

『知らない人からそういうの貰ったらだめなんだよ!』

ユ一ノ君、信じられないのはしょうがないと思うけど、そんな疑いしか感じられない声音は止めて。そしてなのはちゃんは問題点そこでもいいの?。

『……信じられないけど、健太は恩人だから、信じることにするよ』

ユーノ君はいい子だね、うん。

『それじゃあ、昨日の事について話すね』

ユーノ君はゆつくりと、昨日のもやもやの正体、そしてなぜあれがこの街に現れたのかを語りだした。

魔法少女が現れる

ユーノ君の話を纏めよう。まず昨日の高魔力もやもやの正体だが、あれはジュエルシードと言うロストロギアの仕業だったらしい。ロストロギアとはオーバーテクノロジーみたいなものらしい。

ジュエルシードは意思あるものの願いを叶える役割を持つているらしい。触れた者の願いを歪めた上に暴走させて、被害を周囲にばらまくというなんとも人騒がせな代物なのだ。しかも、昨日のもやもやは宿主を求め暴走したものだとか。どう転んでも厄介な代物だよ本当に。

で、なぜジュエルシードが我らが海鳴市に散らばったのかと言うと、そもそもジュエルシードはユーノ君の出身、遺跡掘りを生業とするスクライア一族が発掘していた遺跡で、ユーノ君が見つけた物らしい。そのジュエルシードはスクライアでは手の付けられない程のものであるから、調査団を呼んでユーノ君の居た世界から、きちんと管理できる世界に輸送を頼んだそう。しかし輸送途中に事故にあり、不幸にもこの海鳴市に21個ものジュエルシードが流れついたというのだ。偶然は恐ろしいと言う話か。

さらりとユーノ君が別世界の住人であると言われ驚いたのだが。まあ僕も、転生前の

世界と今の世界では別世界であるらしいから、そこまでおかしい話では無いのかもしれない。

『ボクが悪いんだ……』

『話を聞く限りじゃ、別にユーノ君のせいでも何でも無いんじゃない？……』

『いや、ボクがあれば発見さえしなければ良かったんだ』

なのはちゃんがユーノ君に気遣わしげな言葉をかけるが、ユーノ君には届かないよううだ。責任感が強いと言うか頑固者と言うか。必要以上に責任を背負い込んでいる印象を受ける。

『だから、これからはボク一人でジュエルシードの回収をするよ。君たちがこれ以上危険な目に会う必要はないんだ』

決意の固さを感じさせる、重々しい声だ。言っていることは正しいけど、けどなんだかなあ。僕が言葉を出しかねていると、

『それは駄目だよ』

正義感の塊ことなのはちゃんが、ユーノ君に語りかけ始めた。

『ユーノ君、この世界じゃ助けてくれる人なんて私たち以外に居ないんでしょう？ だったら、頼ってくれていいんだよ？ それに、もう色々知っちゃったし、今更放つとけないよ』

なのはちゃんは、すごいなあ。そりゃあ僕だって、助きたい気持ちはある。でも保身を考える気持ちも確かに存在しているのだ。だからぼつと言葉が出てこない。しかし、なのはちゃんは『放つとけない』から、そんな単純なことで、こんなにも容易く言葉を紡げる。羨ましいほどに強い子だよ。

さあ、僕だって男だ。覚悟を決めよう。

『ユーノ君、僕も手伝うよ。一応は一年デバイスと共に魔法を学んだから、まあ少しは役に立てると思うよ』

『二人とも……、ありがとう』

ユーノ君は申し訳なきように、けれども嬉しそうに、そう言った。

.....

それから数日、思っていたよりも順調にことが進んだ。もともとユーノ君が持っているもの、初日に封印したものと合わせて、手元にあるジュエルシードは6個となる。

しかし順調、といっても決して楽だった訳ではない。ジュエルシードがいつ発動するかも分からないのだから、放課後すぐだったりならいいのだけれど、真夜中に叩き起こされたりすることもあったりと気が抜けない。それにとある男の子が、女の子へのプレゼント用にと拾ったジュエルシードを譲ってもらうのにも苦労した。最終的には僕が貯めていたお金を使い買った、同じようなキラキラした宝石もどきと交換してもらった。

た。ゲームが解禁したときの為に貯めていたお金だが、涙をのんだよ。

でもユーノ君の魔力が回復して来てから戦闘は大分楽になったな。僕とユーノ君が二人掛かりでバインド、なのはちゃんとその間に封印魔法を行うという、面白みには欠けるが確実な戦法であった。というか、面白みを求めるものではないからね。どこぞの神様は、面白みのないことに不満をもらしているのかも知れないけれど。

ユーノ君が魔力を回復してから、戦闘だけに恩恵を受けている訳ではない。今こうして訓練にも付き合ってもらえている。

「そう、これがチェーンバインドだよ」

ユーノ君が魔法陣を展開すると、そこからチェーン状のバインド魔法が飛び出す。

「なるほど、便利だねえ」

チェーンバインド、こんなにも便利なものがあつたのか。これをいろいろ応用したら僕の考えた魔法の大部分が必要なくなるんだけど。あれ、これ僕泣いて良い？べ、べついいし、僕の考えたバインドの方が殺傷力は上だし！

『バインドに殺傷能力は要りません、マスター』

ブラックハートがいじめるよ。最近この子、毒を吐く様になって来た。まあ初期の頃と比べれば人間らしくなって来たみたいで、僕としては嬉しく思う。

「バインド魔法はボクは得意だからね。いろいろ聴いてよ」

とん、と自身の胸を叩く様はなかなか愛らしい。

「助かるよユーノ君、はつきり言つて、一人じゃ限界があつたからね。……と。そろそろ行かないと、すずかちゃん家のお茶会に間に合わなくなりそうだよ」

「もうそんな時間なのかい？ じゃあもう行かないと、……それはそうと、健太は本当に今日のお茶会には行かないの？」

「ははは、この頃は男子の友達と遊んでいなかったからね。残念だけど、先に約束した方に行かせてもらうよ」

そう、今日はすずかちゃん家でお茶会があるのだが、先に男子達と約束したので僕は行けないと断らせて貰つたのだ。ただ、すずかちゃんがあの時、やつぱりと言つた反応をしたのは何故だろう？ あの3人の誰にも、僕は休日の予定を話していないのに。まあ覚えていないだけで話してただけだろう。

「じゃあボクはなのはの家に戻るよ、またね」

「うん、また」

おたがいバイバイ、と手を振つて、廃団地から離れる。さーて、今日は遊び倒すぞ。

.....

『すずかちゃんの家に、ジュエルシードがあつて、それに魔法少女がいるの！』

公園で友人達と缶蹴りで遊んでいる時、なのはちゃんからの念話が届いた。なのは

ちゃんはそれ以上念話を飛ばしてこなかった。これはもしかしてももしかしなくても緊急事態である。とにかくみんなにごめんと謝ってからすずかちゃんの家に走る。間に合う気がしないが、それでも走らざるを得ない。

バスに乗り、すずかちゃんの家の前に着いた頃には先ほどまで張られていた結界が解けていく所だった。

すずかちゃんの家の人にばれないことを祈りつつ、庭に侵入する。その森の様な庭の中で、気絶しているのはちゃんと、なのはちゃんの傍らに立っているユーノ君を見つけた。

「健太、……ジュエルシードは、もう一人の魔法少女に持ってかれてしまったよ……」

僕の姿を確認したユーノ君が、悔しそうに、先ほどのことの顛末を教えてくださいました。

まず、ジュエルシードの反応がお茶会の最中、この庭の中で確認されたらしい。だからお茶会を少しの間外れて、ジュエルシードを回収しようとしたのだ。ジュエルシードは、すずかちゃんのペットの猫を主に覚醒したらしい。それを封印しようとした時、なのはちゃんが念話で言った魔法少女が現れたのだという。

そこから戦闘があつたのだが、現れた金髪の魔法少女はなのはちゃんよりも魔法にたけ、そしてなのはちゃんを圧倒したのだと言う。

「彼女は多分、もっと小さい頃から魔法の修練をつんでいるよ。ボくら全員で力を合わせても勝てるか、正直言つて分からない」

ユーノ君は顔を曇らせる。僕もなのはちゃんも、魔法と関わった時間は短い。確かに、そんなエリートと言つても良いような子と戦つて勝てるとも思わない。でもね、僕の親友を傷つけたんだ。それなりの報いを必ず与えてやるよ。